

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール

1万7122の作品が
寄せられました

テーマ
未来へつなぐ、わたしのエコ活動

受賞者が 決まりました

「第23回中学生作文コンクール」(公益財団法人イオンワンパーセントクラブ主催)の表彰式が、昨年11月22日にホテルメトロポリタンエドモント(東京・飯田橋)のクリスタルホールで開かれました。

今回のテーマは「未来へつなぐ、わたしのエコ活動」。応募総数は過去最高となる1万7122点の中から、文部科学大臣賞などを含む30作品が選ばれました。



受賞者と審査員のみなさんと記念撮影

特別講演会

マシンガンズ滝沢秀一さん ごみとの付き合い方について語る

お笑い芸人で、ごみ清掃員のマシンガンズ滝沢秀一さんが、ごみ収集の仕事を通して得た経験や学びを、笑いを交えながら語りました。

「ごみ問題は想像力の欠如に過ぎない」。街に投げ捨てられたペットボトルが海を汚していること、生ごみの水分を絞らずに収集に出すことは悪臭の元になるばかりか、清掃員の作業着を汚すこと、余った捨てるばかりはいやともらった物や食品が大量のごみを生んでいることなど、日常生活にあるごみ問題を浮き彫りにした滝沢さん。またランドセルやぬいぐるみのリユース、使い終わったらカイロや上履きのリサ



力強い言葉で語る滝沢さん

イルなど、ごみを減らす具体的な方法も紹介しました。

滝沢さんは「地球にとつての最大の脅威は誰かがやってくれるだろうと思うこと」という言葉を引き合いに出し、「一人ひとりが自分の問題に気づき、どう解決すればいいのかを考えれば、より良い社会になると思えます」とメッセージを伝えました。

晴れやかな 笑顔あふれる表彰式

表彰式は主催者を代表して公益財団法人イオンワンパーセントクラブの渡邊廣之理事長のあいさつから始まりました。続いて受賞者一人ひとりに賞状が渡されました。入賞と優秀賞には審査員がプレゼンターとなり、イオンワンパーセントクラブ賞は渡邊理事長、環境大臣賞は環境省の黒部一隆さん、文部科学大臣賞は文部科学省の高市和則さんが賞状を手渡しました。緊張の面持ちで壇上に向かう受賞者たちは賞状を受け取った。先生は現在、アフリカのボツワナ共和国で働いていて、一時帰国をしたタイミングだったといいます。



文部科学大臣賞を受賞した池田健心さん

感動の再会もあり、温かな雰囲気でした。

困気で表彰式は幕を閉じました。

受賞者と審査員らが なごやかに交流

表彰式後には懇親会が開かれました。式典の緊張感から解放された受賞者、保護者、審査員はリラックスした雰囲気になごやかに交流しました。

審査員長で教育アドバイザーの清水章弘さんは、日ごろ情報を書きためているノートを受賞者だけに特別に紹介。審査員で作家の汐見夏衛さんのファンだという親子は著書を持参してサインをもらい、直接話せたことに大喜びでした。



なごやかな雰囲気での懇親会



公益財団法人
イオンワンパーセントクラブ
理事長 渡邊 廣之

受賞された中学生のみならず、おめでとございます。全国から1万7122点という膨大な応募があり、大変うれしく思っています。また、審査員のみならず、ご後援いただきました文部科学省、環境省、朝日新聞社、朝日学生新聞社に厚く御礼を申し上げます。

イオンワンパーセントクラブは、イオングループの主要各社が利益の1%を拠出し、社会的責任を果たすことを目的に、子どもたちの健全な育成、諸外国との友好親善などの公益目的事業を行っています。中学生作文コンクールは、次代を担う中学生に環境問題を通じて考え、書く力を養ってほしいという願いを込めて、2003年から継続して開催しています。

今回のテーマは、「未来へつなぐ、わたしのエコ活動」。寄せられた作品には、気候変動や海洋ごみといった地球規模の課題に対して、自分自身でできることは何かを考え、それを行動に移す足跡がしっかりと記されていました。独自のアイデアや実践を通じて得た新たな気づきは、私たち大人にとつても大いに気づかされることでした。

審査に私も参加しましたが、優秀な作品ばかりで、審査員を大変悩ませました。受賞されたみなさんには、そのみずみずしい感性と行動力で周囲を巻き込み、地球の未来を守るリーダーとして大きく羽ばたいてもらえと期待しております。

受賞おめでとございます

文部科学大臣賞

福岡県 直方市立直方第二中学校2年 **池田 健心**

環境大臣賞

神奈川県 鎌倉市立手広中学校3年 **原澤 幸希**

イオンワンパーセントクラブ賞

広島県 英数学館中学校3年 **藤田 崇弘**

優秀賞

東京都 東京学芸大学附属世田谷中学校2年 **太田 綾音**

広島県 広島市立国泰寺中学校3年 **小林 巴菜**

愛知県 名古屋市立大曽根中学校3年 **神原 托純**

愛媛県 愛媛大学教育学部附属中学校2年 **弘松 詩菜**

宮崎県 都城市立姫城中学校3年 **北郷 優斗**

福島県 いわき市立泉中学校3年 **松浦 里緒**

東京都 東京学芸大学附属世田谷中学校2年 **山田 愛華**

入賞

東京都 学校法人北豊島学園北豊島中学校1年 **稲垣 奈名子**

福岡県 福岡市立高取中学校2年 **後川 優紀**

鹿児島県 薩摩川内市立東郷学園義務教育学校3年 **宇都 千遥**

広島県 広島市立広島中等教育学校2年 **小野 凛花**

岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校2年 **小野寺 奏和**

静岡県 静岡市立城内中学校3年 **小原 莉緒**

東京都 学習院女子中等科2年 **竹内 あかり**

京都府 京都市立太秦中学校1年 **竹鼻 麻実**

大阪府 大阪市立北稜中学校1年 **陳 国 栄**

大阪府 大阪市立北稜中学校1年 **土井 ころこ**

東京都 練馬区立北町中学校3年 **富久 眞斗**

千葉県 我孫子市立白山中学校1年 **長野 遥貴**

沖縄県 昭和薬科大学附属中学校2年 **仲村渠 愛結**

北海道 鹿追町立鹿追中学校3年 **西垣 美緒**

東京都 板橋区立桜川中学校2年 **服部 華乃**

東京都 東京学芸大学附属世田谷中学校2年 **坂東 可奈子**

兵庫県 学校法人須磨学園須磨学園中学校1年 **藤 彩 乃**

東京都 ドルトン東京学園中等部2年 **山内 南都子**

長野県 山ノ内町立山ノ内中学校3年 **山口 庭来**

広島県 広島市立三入中学校3年 **横田 梨緒**

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール

文部科学
大臣賞

私たちの、たった一つの地球

直方市立直方第二中学校 2年

池田 健心
いけだ けんしん

「地球は、たった一つしかないんだよ」。

ある先生との出会いが、私を変えてくれた。

先生との出会いは、私が小学四年生のときだった。先生は、始業式の日、先生として働くのは初めてだと教えてくれた。それと同時に、先生になる前は、世界のいろいろな国に行つて、ボランティア活動をしていたということも教えてくれた。私は衝撃だった。それまで海外との接点なんて、外国語活動のA・L・Tの先生との授業ぐらいしかなかった私は、世界の国々を知っている人がこんな身近にいるということ、そんな人が自分の担任の先生になるということに驚きを隠せなかった。なんだか急に、私の中の世界との扉が開いたような気がした。

四年生の学習が始まると、先生は毎日のように、世界の国々のことを話してくれた。言語や文化、スポーツ。どれも興味深いものばかりだった。その中でも、特に心に残ったのが、

戦争や平和、環境問題についての話だった。今、地球では、ごみ問題や温暖化の問題、海洋汚染、森林破壊、さまざまな問題が起きていること、そして、その問題が深刻化すれば、将来地球はなくなってしまうことを、写真や資料をもとに、先生は私たちに語ってくれた。

私はそれから、自分にできる行動は何かを調べ、まずはごみの分別や、3Rを実践してみた。家族にも呼びかけ、直方市役所が主催している『環境カレンダー』に取り組み、節水や節電をし、記録をつけて振り返った。高学年に進級すると、地域の清掃活動に参加したり、現在の環境問題のことについてより深く知りたいと思い、SSH指定校の高校を訪ねて、環境問題に詳しい高校生に話を聞いた。より多くの人に現状を知ってもらうため、学んだことを自主学習ノートにまとめて、クラスの人々に読んでもらったりした。

私は今、中学二年生になった。現在も、自分にできる取り

組みを続けながら、SSH指定校への進学を目標に、勉強と部活を両立する日々だ。高校では、特に関心のある、海洋プラスチックの問題についての解決方法を探索していきたいと考えている。海は、世界の国々とながっている。海の問題について考えることは、地球をまるごと大切にすることになると私は思う。

先日、久々に母校の小学校を訪ねた。担任だったあの先生は、今はアフリカ南部にあるボツワナという国で先生をしているそうだ。先生が教えてくれたことは、私の人生を変えるきっかけになった。私の小さな行動でも、きっと地球の未来を変えていくと信じている。生物を思いやる心を持つことができれば、みんなが幸せで、平和な地球をつくることにもつながると思う。私は行動を続けた。たった一つの地球を守っていくために。

注1…外国語指導助手 注2…Reduce(リデュース)、Reuse(リユース)、Recycle(リサイクル)の3つのRの総称 注3…スーパーサイエンスハイスクール。文部科学省が指定する、先進的な理数教育を提供する取り組みのこと

受賞した
感想

表彰式に恩師の先生が来てくれて、一緒に写真を撮ったことがうれしかったです。「エコルとごし」では、「たった1秒の間に世界の環境がどう変化するか」という展示が心に残りました。いい賞をもらい、楽しくて光栄な2日間でした。

環境大臣賞

雨垂れ石を穿つ

鎌倉市立手広中学校 3年

原澤 幸希
はらさわ ゆき

私は人前に立つ事が苦手だ。皆をまとめ、巻き込める力は無い。でもこのまま何もしないのは嫌だ。ならば二人でも動き出せば良い。

小学三年生の時にダボス会議を見てプラスチックごみ問題を知り、何の疑問も持たずに使つて捨てていた物が地球を壊していたなんてと衝撃だった。私にも何かできないかと翌日から給食のストロー不使用を決め、先生に許可を得て直接飲むことにした。最初は恥ずかしくて自分の長い髪で隠していた。そんなの意味がない、汚いと言われ泣いて帰った日もあったがやめたくなかった。この問題を図書室で調べ、大学教授や研究者のセミナーに参加しノートにまとめた。海洋ごみの8割は陸上からと知り、登下校中にごみ拾いを始めた。

でもこれでは何も変わらないと勇気を出し活動家の方に相談した。緊張していたが、ノートを見せた事で思いが伝わりSNSで私の活動を紹介して下さった。こうして学校と家だけの世界から大きな世界へ広がっていく。

「自分の目で確かめてもらえん」と言われ、ヨットで東京湾マイクロプラスチック調査に行つた。顕微鏡で多くのマイクロプラスチックの間を泳ぐプラントンが見えた。これを食べたら食物連鎖に影響が出る。怖くなった。これは本の中の話ではなく現実なのだ、教科書では伝わらないこの現状を私が伝えなければと、ポスターを作り学校に掲示した。レポートがSDGs作品大賞で大賞を受賞し、黒岩知事や県の首長の方々に活動を知って頂けた。これを機に講演会で発表する事になった。人前で話す事が苦手な私には大きな挑戦だが、思いを伝えたくて何度も練習した。給食のストロー変更には大人の力が必要で、力を貸して下さい。その言葉が次に繋がり、国際環境会議や多くのメディアで発表する機会を頂いた。そして活動を知った鎌倉市が動いて下さり、私の学校でプラスチックを分解する実験を行う事になった。その後遂にプラスチックを分解する新種の微生物が発見され、更に鎌倉市の公立小中学校でプラスチックストローを廃止し、100%生分解性ストローへの変更が決まった。想像も出来なかった結末だった。そしてこの夏、環境大臣との面会を果たした私を、あの頃私は想像出来たのだろうか？

たった二本のストローを使わないという小さな事から始まった。でもその強い思いは必ず誰かに届き、社会を変えられると実感した。実際始めた時は何かしなければという衝動で、動機なんて後付けだ。ただ楽しくて活動が続いていた。初めから大きな理想を描く計画的行動は効率が悪い。でも実際は計画通りいかない事の方が多く、理想への道のりの長さに挫折する人もいるだろう。私はゴールもわからずただ武者羅で、効率は悪かったかもしれないが何があっても「やめない、続ける」と小さい事を重ね、少しずつ自分ができる事の幅を広げた。小さな事でも続ければ変化を起こせるのだと、皆に知ってもらいたい。これが今の私の目標だ。

受賞した
感想

ストロー1本の小さな活動がすごい賞に選ばれて、とてもうれしかったです。表彰式に全国から集まった中学生の作文について知ることができ、環境問題を考えたり行動したりするたくさんの仲間がいるのだと思えました。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール



海のゆりかご大作戦

英数学館中学校 3年

藤田 崇弘



今、私の住む瀬戸内海で何が起きているのか。私は知らなければならぬ。そして行動しなければならぬ。

家族で潮干狩りに行った思い出は楽しくも苦い思い出になった。なぜなら二つもアサリが採れなかったからだ。昔は採れていたのに何故採れなくなった

のか。インターネットで調べてみた。すると地球温暖化が原因だということが分かった。地球温暖化で水温が上がっていることは耳にするが、水温が上がることで何が起るのか。海の生態系との関係が分からず、私はモヤモヤした気持ちを抱えていた。

そんな時、地元の漁業組合の方と海の環境について考えるイベントに参加する機会を得た。そこで、海藻が急速に消えていることを知った。水温上昇で藻が育たない、もしくはごみが原因だろうと疑った。しかし違った。

「食害だ。今、食害が起きている。今すぐ行動しなければならぬ」

漁師のおじさんの叫びともいえる言葉だった。私は背筋がびんと伸びた。水温が高い海域に生息するアイゴという魚が瀬戸内海で大繁殖している。アイゴは藻を好んで食べ尽くし、海藻が消えたことで食物連鎖が崩れ、魚もアサリも減ってしまったのだ。

私はこの事実を知り、魚の住処や産卵場所となる「海のゆりかご」と呼ばれるアマモを育てる活動に参加した。まず、海の環境を知るため、地引網を行った。期待は裏切られ、網にかかったのは大量のごみだった。怒りと落胆でやる気を失いかけていたが、目の前に広がる深い青の海を見たら力が湧

いた。そして浜辺の清掃活動から始め、いよいよアマモの養殖に取りかかった。

漁業組合の人が船で雨の中、アマモを採りに沖合へと船を出してくれた。そして二ヶ月間、玉ねぎネットに入れて海水につける。引き揚げたアマモの種子をピンセットで選別する。その作業は気が遠くなるほど

根気が必要だった。さらに二ヶ月低温で熟成させる。最終段階は種子を堆肥入りの土に混ぜ込む。その土で、なんとアマモの種子入り泥団子を作るのだ。できたアマモ泥団子をガーゼに包み、弁当箱が入るくらいのおおきさの竹籠に入れて、海に沈める。播種をみんなで願った。

半年後、漁業組合の方が海中写真を見せてくれた。根を張り、黄緑色に揺れる海のゆりかごの姿に生命力を感じた。愛おしかった。私は紙粘土団子で失敗したことや、悪天候で全部流されてしまった無力感や苦勞も全部報われた気がした。

知ること、行動すること。
 アマモを通じて学んだ。漁業組
 合の方や地域の方と一緒に海
 を守ろうと行動できたこと
 は、大きな自信となった。
 未来へつなぐ命の海。その青
 い海の底に、緑に輝くゆりかご
 を育てていかなければならな
 い。輝きを絶やさぬよう、仲間
 との作戦会議は続く。

受賞を知った瞬間は、うまく態度に示せませんでしたでしたが、実はとてもうれしくて表彰式が楽しみでした。講演会や懇親会で聞いたお話、「エコルとごし」での学びなど、知識や情報を手に入れたので、自分のものにしていきたいです。

受賞した感想



優しさを編み直す

東京学芸大学附属世田谷中学校 2年

太田綾音



アクリルたわしは環境に優しい。私はそう信じていた。アクリル毛糸を編んで作ったエコたわしは、細かい繊維が油をよく吸着し、洗剤をあまり使わずに済む。母も環境を思い心を込めて編んでいたし、私もそれを誇らしく感じていた。

然素材の糸でたわしを編み油を塗った皿を水だけを使ってこすり、汚れの落ち具合や使い心地、耐久性を比べた。すると、綿で作られたものが、総合的に見て最も優れていることがわかった。

実験を終えた私は、綿のエコ
たわしを皆にも使って欲しい

しかしある日、環境問題の記事を読んでいたとき、目に飛び込んできた一文によって、その信念が大きく揺らいだ。「アクリルたわしはマイクロプラスチックの原因になる」

実験を終えた私は、綿のエコ
たわしを皆にも使って欲しい
と思った。各家庭の毎日の小
さな変化が、地球の未来を少
しでも守ることができるかも
しれないからだ。では、どうす
れば綿のエコたわしを、日々
暮らしに浸透させることがで
きるか。

たようだった。石油でできていた
 ザクリル毛糸は、洗うたびに
 繊維が抜け、排水に流れ出し

まず、学校生活にエコたわし
作りを取り入れてはどうだろ
う。例えば家庭科の授業で、私

てしまう。それがやがて海へ届き、魚や鳥、そして人間の体にかけて入り込む。信じていた「エコ」は、実は環境を傷つける存在だったのか。母も私も、言葉

「なぜアクリルでなく綿を使うのか」を学べば、環境問題と自分の生活との結びつきを実感できるはずだ。

しかし、落ち込んでばかりもいられない。私たちは氣を取り直して、別の糸で作ってみることにした。綿、ウール、麻。自

地域へ広げられると尚良い。授業で作ったたわしを文化祭や地域のバザーで販売したり、ワークショップで世代を超えて

一緒に作ったりする。そして売上の一部を環境保護団体に寄付すれば、学びが社会への貢献にもなる。こうした活動を通して、綿のエコたわしが、自然と家庭にも受け入れられていくと理想的ではないか。

今回の出来事を通して私は、「正しいと思っていたこと

が、実は間違っていたことが
あると改めて実感した。そし
て、間違いに気づいたときに立
ち止まってしまうのではなく、
「すぐに方向を修正すること」
が大切だと学んだ。アクリル
たわしをやめ、新たに綿で編み

直したように、今できる最善を考え、行動することが大事なのだ。

環境対策の評価は時ととも
に変わる。だからこそ、その都
度確認し、より良い選択を重
ねる必要がある。「未来につな
がるエコ」を探す新たな一歩を
踏み出すことをやめなければ

ば、地球に優しい社会が、きつと待っているに違いない。

力を入れて実験したり、提案を考えたりしたので、受賞は驚きました。がうれしい方が大きかったです。滝沢さんの講演を聞いて、これまで私はごみについての知識や興味がなかったなと気づき、絶対に改善していきたいと思いました。

受賞した感想

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール

優秀賞

見えないエコ、見つけた！

広島市立国泰寺中学校 3年

小林 巴菜

先日、私が携帯を見ていると、母が「データを消すだけでエコに繋がるって知ってた？」と言いました。私は携帯の使いすぎが目に見え、依存しすぎはよくないという話は聞いたことがありましたが、保存している写真や動画のデータが環境に関係しているというのを初めて知って、とても驚きました。私は気になって調べてみました。

スマホやパソコンに保存されたデータは、多くの場合、クラウドと呼ばれる場所に保管されていて、そこでは大量の電気を使って情報を処理しているそうです。その仕組みを支えているのが、世界各地にある「データセンター」と呼ばれる大規模な施設です。そこではコンピュータが二十四時間動いていて、冷却のための空調設備もずっと稼働しています。これらすべてに使われる電力の多くは、火力発電などの方法で作られていて、大量の二酸化炭素を排出しています。私たちが、携帯の中に何

気なく保存している大量の写真や動画が、実は地球温暖化の1因になっているということを知りました。環境問題はずっと遠い世界だと思っていたのに、携帯の中から、関係しているなんて、まったく想像していませんでした。

それをきっかけに私たち家族は夏休みの自由時間を使って消した写真の枚数を競う「消しエコ選手権」をしました。

家族みんなで必要のない動画を整理したり、とても盛り上がりを見せました。消しエコ選手権をすることで私たちの携帯の保存容量がかなり減り、携帯の動作が少し軽くなったような気がして、ちょっとしたうれしくなりました。エコ選手権を終えると、母は「小さなことでも積み重ねれば地球に優しい行動になるね」と言いました。その言葉に私は胸を打たれ、友達にも広めてみようという気になりました。友達に最初はピンときていない様子でしたが、理由を説明すると、「それって結構大

事なことなんだね、私もやってみる、スマホも軽くなるし地球にもいいなんて、すごくいいじゃん」と納得して笑ってくれました。

この出来事を通じて、環境に優しい行動は特別なことではなく、身近な暮らしの中からも始められるのだと気づきました。

家族から友達へと繋げていくエコの連鎖で環境と大切な人を守り、みんなが笑顔になるような世界になってほしいです。これからも、自分にできる小さなことを少しずつ続けて、誰かに伝え、良い連鎖を広げていきたいと思っています。一人一人ができる簡単なことをみんなが始めて見えないエコをしたいです。

優秀賞

ヤギとSDGs

名古屋市立大曽根中学校 3年

榊原 托純

「ヤギと緒に中学校の清掃奉仕活動を実施し、SDGsを実現します」

これが僕の生徒会執行委員に立候補した時の公約だ。この選挙公約を思いついた時は、単に選挙で当選したいという一心だった。そして僕は当選した。

当選してから、僕はヤギ除草のことをもっと知りたいたいと思い、調べてみた。通常は除草する場合、除草剤をまくか、草刈り機で草を刈り、刈り取った草を焼却するかのどちらかだ。しかし、除草剤は環境汚染につながってしまう。草刈り機は燃料が必要で、草を燃やす際に大量のCO₂が発生してしまう。だが、ヤギ除草は、草をヤギが根から食べてくれるので環境にやさしい。高齢化で除草ができにくい田舎では、近年熊が出没し襲われる事件が多発している。草を刈り取っておけば害獣が発見しやすくなるため、ヤギ除草のメリットは大きい。実際に大学でヤギを飼育し、校内を除草してもら

うヤギ部という部活も存在すると新聞記事に掲載されていた。興味深いと思った。

僕は、学校のみんなにもヤギ除草の素晴らしさを伝え、SDGsへの関心を深めてもらうためにも選挙の公約を実現したいと思った。しかしながら、いざヤギに学校へ来てもらおうと考えると、多額の費用が大きな壁となった。解決策が見つからないまま、どんな時

間だけが過ぎていった。そんなある日、名古屋市内でヤギと交通安全運動を実施したという記事が新聞に掲載されていたのを見つけた。名古屋市内でヤギを飼育している土木会社が、毎年協力して開催しているらしい。これはチャンスだと思い、その企業のHPに協力してもらえないかメッセージを送ってみた。しばらく返事がなかった。やがて無理だったかとあきらめそうになった時、学校の先生からその企業が協力してくれると連絡を受けたことを伝えられた。僕はとてもうれしかった。

そして雨による一度の延期を経て、待ちに待ったクリーンキャンペーン当日を、僕は生徒会長として迎えることができた。いつもの学校にヤギが来て、草を食べてくれている光景に、僕は感動した。学校のみんなとヤギに癒されながら環境について考えるこの素晴らしき一日を僕はずっと忘れないだろう。

猛暑や大雨による洪水等、最近の異常気象には恐ろしさすら感じる。この二、三年でも異常な暑さはどんどん増してきている。僕たち一人一人がもっと環境問題に関心を持ち、自分たちができることから取り組み始めることが大切ではないだろうか。ヤギ除草がきっかけで、学校のみんなもSDGsに関心を持つてくれたらうれしい。僕には将来、ロボットクリエイターになるという夢がある。自然環境を守り、異常気象を食い止めることができるようなロボットを作り、世界を守るような人に僕はなっていきたい。

受賞した感想

「ヤギとSDGs」というテーマで笑ってもらえるかなと思って書いたので、受賞はとても驚きました。ヤギを学校に呼ぶイベントはとても反響が大きかったです。今後はまた別のテーマで環境問題について取り組んでみたいのです。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール

優秀賞

『さらば、ビニール傘袋』

愛媛大学教育学部附属中学校 2年

弘松 詩菜



みなさんの家にエコバッグはいくつありますか？今は買い物の際にエコバッグを使用する人が多いと思います。これはどの程度エコに繋がっているのでしょうか。

我が家の場合、以前は買

物の際にレジ袋をもらって、荷物を袋から出したあとは生ご

みを入れる袋として第二の役

割がありました。今はエコバツ

グを使うので、生ごみのために

袋を購入している。母の周り

でも大きなゴミ箱に捨てる前

に「レジ袋サイズの袋にゴミ

をまとめるので購入している

人が多いそうだ。第二の役割

があるレジ袋。それに比べて傘

袋ってエコじゃないと思う。私

は常々雨の日に商業施設の入

口で散らばる傘袋を見てモ

ヤツとしていた。濡れた傘から

落ちる水滴で床は滑りやす

くなるし、汚れる。衣類にも水

が付く。だから傘袋は必要であ

る。たしかにそうだが薄い傘

袋はうまくはがれず一枚とるつ

もりが二枚三枚くっついてき

て、いらぬ分は横のゴミ入れ

に捨てる。ちゃんと一枚とつても

傘の先が突き出て穴があき、

またもう一枚使う。一枚だけ利

用した場合も使用後はなんの

利用もできないのでその場で

捨てて帰る。これをなんとかで

きないかと考えていた。

私は愛媛大学のジュニアド

クターに参加している。私の研

究テーマは傘の水滴を落とす

道具についてだ。すでにマイク

ロファイバーで両側から挟む

(スポンプレス機のような)装

置を販売している会社もある

のだが導入している施設は少

ない。傘袋よりエコなのに普及

していない理由として、メンテ

ナンスが必要という設置側の

意見と布との摩擦で傘が傷み

そうという使用者側の意見が

あることがわかった。

私は研究において、まずは

使用者側の意見を優先するこ

とにした。摩擦で傘の生地や

骨が傷まないものを考えた時

に、空気を利用して水分を飛

ばす麺の自動湯切り機を参考

にしたが、メンテナンズや維持

費の問題もある。そこで、電動

ではなく人力でできる物を作

り出せたらと考えた。昔の足

踏み脱穀機をイメージして二

年目の研究で試作品を作った

がエアがうまく出ず水滴を飛

ばすのとはほど遠い出来で

あった。二年目の今年も試行

錯誤を繰り返しているがまだ

まだである。

私の研究が傘袋の無駄をな

くす将来に繋がる可能性は低

いかもしれない。だが、普段の

生活の中でモヤツとしたこと

を流さずに自分の中で突き詰

めて考えることもエコ活動の一

つではないだろうか。

海岸のゴミ拾い、リサイクル

活動、省エネなどすぐにでき

ることをコツコツ続けること

もとても大事だ。それに加え

て皆が「これってエコじゃない

よね」と思ったことを「じゃあ、

どうしたらいい？」と一人ひと

りが考えることもとても大事

なエコ活動だと私は考える。

受賞した感想

講演会での滝沢さんの話を聞いて、自分も環境のために何かできることが増えたらいいなと思いました。傘の水滴を落とす道具の開発はまだ続いていて、なかなかうまくいかないけれど、いろいろな方向から試していきたいと思っています。

優秀賞

小さな循環型社会

都城市立姫城中学校 3年

北郷 優斗



宮崎県に移住してから、私の暮らしにはいつも「ニワトリ」と

「畑」があった。このプロジェクトは、決して他の誰かが言い出したことでも、親の手伝いでも

なく、小学三年生の頃から私が黙々と続けてきたものだ。多

くの人が環境問題は「大きなもの」だと語るが、私は毎日ニ

ワトリと土と向き合う中で、気

候変動やゴミ問題といった深

刻な課題を、とても身近なものだと感じている。きっかけは、

小学二年生のときに学校で育

てたミニトマトの味が忘れられ

ず、「自分で食べる野菜を自分

で育てたい」という単純な思い

だった。移り住んだ曾祖父の家

で、私は、家の土を活かした

野菜づくりをしようと決めた。

何度か失敗を繰り返すうち

に、この土地で採れた野菜から自家採種したタネは、驚く

ほど元気に育つことを発見した。畑の栄養は、台所の生ごみ

を活用したコンポストと、三年

前に飼いだめたニワトリの糞尿

から作る堆肥でまかなう。こう

して、私の畑では小さな命と土

が互いに助け合う「循環」が静かに回っている。

ニワトリは、私の環境活動を大きく広げてくれた存在だ。ニ

ワトリを飼いだめた当初、害獣に襲われる悲しい出来事があ

った。その悔しさから、私はニワトリを徹底的に守るため、廃

材を使って試行錯誤を繰り返した。その中で、ニワトリの「雑

草を食べ、土を掘り返す」という習性を活かして、底のない移

動式の鶏小屋、通称「チキントラクター」を開発した。このチ

キントラクターを畑に置くようになると、私は都城が抱える

意外な環境問題に気付いた。ゴミ捨て場に山積みになった、

大量の雑草ごみだ。また、地域全体の高齢化が進み、雑草の

処理に困っている人も多い。この現状を目の当たりにし、「私

のチキントラクターが、この地域の課題を解決できるかもしれ

ない」と考えるようになった。

そこで私は、チキントラク

ターを地域の空き地などに貸

し出すことを始めた。最初は

私はいきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

ていきなり、環境問題と向き合っ

受賞した感想

受賞はとてもうれしかったです。作文は書きたい内容がたくさんあったのでまとめるのが少し大変でした。講演会は、滝沢さんの「ごみを資源として有効活用する」という考えが私の取り組みと似ていると思い、感銘を受けました。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

第23回 中学生作文コンクール

優秀賞

今の私にできること

いわき市立泉中学校 3年

松浦 里緒



私は海が大好きです。小学生の頃からサーフィンという競技に熱中しています。

ある日の放課後、私は地元である、いわきの海で大会に向けて練習していました。浜辺のひんやりとした冷たい砂、しぶきを上げて崩れていく波の音、海面にぼんやりと映し出される夕日、全てが私を優しく包み込んでくれました。波に乗っていると、突然大きな何かにぶつかってしまいました。

見てみると、台風によって流れ込んできた大きなゴミが浮いていました。奇跡的に大怪我をせずにすんだものの、私の大切なサーフボードに大きな穴が空いてしまいました。私はそれを見て、とても悔しくて、涙が出ました。それと同時に、この状況を深刻に感じ、今海で何が起きているのか、興味を持ちました。

本やインターネットで調べてみた結果、「これらのごみは全て人間によるもので、海を汚し、また、海に住む生き物たちを傷つけ、苦しめている。特に二番多いプラスチックは、長い時間をかけて分解されるため、2050年には海に住む生き物の重さより、海洋プラスチックの方が重くなる。そして、これらのごみは、最終的には細くなり、私たち人間の体内に取り込まれる」という事が分かりました。私はこの事実を知り、今のままでは、自然と調和した生活が送れなくなるかもしれない、と思いました。また、海自身が叫ぶことはできないけれど、私たちがその声を代わりに届けることはできるのではないかと感じました。

今、私は地元で、同じ趣味をもつ仲間と共にビーチクリーンに取り組んでいます。ビーチクリーンをする事で、砂浜にあるごみを少しでも減らす事ができ、そのごみが海に流れていくのを防ぐ事につながります。他にも、ごみの分別をしたり、ペットボトルや食品トレイはリサイクルに出したり、エコバッグを持ち歩いたりするなど、私たちにできることは、

考えてみると沢山あります。

私は、ビーチクリーンをしている時、落ちているごみが多すぎて、「本当に自分は力になっているのか？」と思うことが時々ありました。自分の今の力では何ともできない歯痒さを感じるのです。ですが、仲間と共に活動したり、この問題を学ぶにつれ、それを通して、「小さいことでも、一人一人が自分にできる事に取り組んでいく事は、大切なんだな」と気付くことができました。「微力は決して、無力ではない」これを胸に刻んで、これからはより多くの人にこの問題を広めたり、活動したりして、少しでもSDGsに貢献できるように頑張っていきたいです。

受賞した感想

昨年の夏休みは、英語弁論大会の原稿とこのコンクールの作文で2回、サーフィンを通して考えた海の環境問題について書きました。周りの人には「夏休みにがんばっていたので、受賞できてよかったね」と言われました。

優秀賞

捨てる油で空を飛ぼう！

東京学芸大学附属世田谷中学校 2年

山田 愛華



今年に入って「SAF」という言葉をテレビCMで見聞きすることが多くなった。SAFとはSustainable Aviation Fuelの略称で、持続可能な航空燃料の意味である。家庭用の使用済み油を回収し、航空機の燃料として利用すること、CO₂排出量を削減すること、それが加え回収場所が大幅に増えたことが大きい。昨年SAFのプロジェクトの存在を知り、取り入れ始めた。

このプロジェクトは「Fly to Fly Project」として、石油エンジンリアリング会社が東京都と航空会社と手を結び、2024年3月に開始した。当初は、家庭用油の回収が始まって間もなかったこともあり、認知度も低かった。

「家庭用油で飛行機なんて飛ばせるの？」

去年の私は半信半疑のまま、食事の準備で出た油を集め始めた。当然だが、回収する油は不純物のないものに限られるため、一度の使用量の半分くらいしか残らないこともあった。回収の作業に不慣れだったこともあり、結果的に去年一年間で4リットルしか集めることができなかった。そこで今年は一年間で8リットルを目標にした。倍の数字に設定した理由は、家族全員の意識も高まって作業にも慣れてきたこと、それに加え回収場所が大幅に増えたことが大きい。去年まで最寄りの回収場所が横浜市と遠く、気軽に運ぶに行けなかった。それが、今年五月から都内に設置場所が一気に増えたことでより身近に利用できるようになった。東京都が主催する回収キャンペーンやPRイベントが行われたことが回収場所増加につながった。実際に都内の回収場所に行くと、去年は誰もいなかったBOXの周りに、今年は興味深そうに覗き込む家族連れの姿が増えていた。現時点で既に3リットルを回収場所に運んだので、順調にいけば目標は大きくクリアできそうである。こうした行動で、日常生活の中で自然にエコ活動ができるようになってきたと感じている。

この夏休みに、旅行で羽田空港を利用する機会があった。空港で読んだ航空会社のパンフレットに「Fly to Fly Project」についての記事を見つけて心が弾んだ。記事の内容は、回収した油を大阪府の製油所で国産SAFとして量産し、ついに2025年7月、羽田空港の定期便に配給が開始されたというものだった。まだまだ実用的に運用されるのは先になるそうだが、着実に、確実に、自分のエコ活動が未来に繋がっていることが実感できたことがうれしかった。「みんなで飛行機を飛ばそう！」。今は本気でそう思っている。将来、このプロジェクトで飛ぶ飛行機に乗って旅行するのが、昨年から密やかで大きな夢だ。それは十年後？二十年後？どんな社会になっているのだろうか。今からとても楽しみである。

受賞した感想

受賞したことで、日々がんばった記録を多くの人に読んでもらえて、うれしいです。「エコとごし」でのワークショップでは、それぞれの人が書いた作文のテーマを話し合ったことで、全部が繋がっていると気づくことができました。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

審査員からのメッセージ

審査員から作品を読んだ感想や講評をいただきました

審査員長 教育アドバイザー 清水 章弘

中学生が書いてくれた作品をたくさん読ませてもらいました。なかなか差がつけられない、そんな中でみなさんの作品が選ばれました。努力や行動の差もあるけれど、一番は「運」だと思います。運良く選ばれた人には、次に挑戦していく責任が生まれるのではないのでしょうか。中学生には勢いがあります。その勢いを使って、活動を発信したり、大人から吸収したりして、次の一步を踏み出してください。これからの活躍を祈念しています。



作家 汐見 夏衛

みなさんは約1200字という長い文章を書くことができました。しかも内容の濃いものを書ける力がある。それは一つの才能だと思いますので、大事にしてほしいです。みなさんの作文からは、ご家庭の様子が垣間見えました。家族で環境問題について考えながら生活していて、エコ活動が身に染みていることを感じました。勉強になりましたし、私も環境問題についてしっかり考えなきゃと思う審査でした。すてきな機会をありがとうございました。



お笑い芸人 兼 ごみ清掃員 マシガンズ 滝沢 秀一

私は人生において大切にしていることが三つあります。一つは「体を使って勉強する」こと。体で覚えたことはしっかり刻み込まれて忘れません。そして、目の前にあることが本当にそうなのか「疑う」こと。考えるのが大事ということです。最後にそれを「分析する」ことで、自分の考え方が構築されていくのではないかと思います。みなさんの作文には小さな芽が出てきていました。これからどうやって伸ばしていくのかを楽しみにしています。



朝日学生新聞社 取締役会長 高田 圭子

審査の際に心がけたことは、「一步踏み込んでいるか」という点でした。ご存じのとおり、環境について知りたいと思ったら、情報はあふれていて簡単に調べられますし、AIがそれっぽいものを書いてくれます。そんな時代に、どんな意識を持って考えたり、実践したりしているか、その先をちゃんと書けているかを見ました。みなさんはそれができています。この先も、リアルを表現するという意識を持って羽ばたいてほしいです。



受賞の副賞として 環境エコツアーにご招待

都内のエコスポットで 見て、触れて、話して、食べて考えた!



表彰式の翌日、受賞者たちはバスに乗って東京都内をめぐる環境ツアーに出発しました。さまざまな体験を通して交流を深めながら、環境についてより広く、深く考えて新たなアイデアを得ました。

訪れたのは自然豊かな公園内にある品川区立環境学習交流施設「エコルとごし」。館長らの案内で館内を見学しました。エコルとごしの建物は環境にやさしい「ZEB」関連設備を備えています。「太陽光パネル」で作った電気を「蓄電池」という

エコルとごし

環境学習施設の
見学とワークショップ

大きな電池に蓄え、夜間の照明や災害時に使うといった取り組みです。

映像展示「バランスプラネット」は、大型映像が映し出された壁にタッチすることで、使い過ぎの資源ごみを減らす方法、再生可能エネルギーを学びます。常設展示「トイカケノジカン」は1秒、1日、1年、10年をキーワードに、身近な視点で環境について考えることができます。

対話の実践として、中学生が5グループ、保護者は3グループに分かれて、自由テーマでディスカッションをしました。中学生は「物を大切にすること」「食品ロス」などのテーマを議論しました。発表では「物を長く使い続けてごみを減らしたい」「ごみの未来を考えることが大事」など、自分たちの考えを述べ、ほかのグループの意見に耳を傾けました。



野菜のおいしさを発見!

WE ARE THE FARM 赤坂

昼食は港区赤坂にあるオーガニックレストラン「WE ARE THE FARM 赤坂」で取りました。この店は自分たちの畑で作った無農薬・無化学肥料の野菜を提供しています。

丁寧に調理されたマチルダ(じゃがいも)のポタージュや大根の煮物などに舌鼓を打ちます。驚きの声が上がったのは「採れたて野菜の皿」という、その日の朝に採れた野菜の盛り合わせ。新鮮な水菜とからし菜、皮ごと食べられる里芋などの芋類、にんじん、ビーツ、玉ねぎのグリル。ディップソースが添えられていて「何もつけなくてもおいしい」と手が伸びます。「皮も食べられるなんて」「嫌いなはずのにんじんがおいしかった」という声も出ていました。



※ZEB(ゼブ)とは、「Net Zero Energy Building」の略称で、快適な室内環境を実現しながら建物に使うエネルギー収支をゼロにすることを目指した建物のこと。

公益財団法人 イオンワンパーセントクラブ

イオン1%クラブの活動紹介

「お客さまからいただいた利益を社会のために役立てる」という想いのもと、

イオングループの主要企業が税引前利益の1%相当額を拠出し、

子どもたちの健全な育成 諸外国との友好親善 地域の発展への貢献 災害復興支援

を主な事業領域として、環境・社会貢献活動に取り組んでいます。



子どもたちの健全な育成

環境・社会をテーマに、子どもたちが社会的なルールを学びながら身近な地域の問題を主体的に捉え、考える力を育てます。



諸外国との友好親善

学生たちに国際的な文化・人材交流の機会を提供し、相互理解を深めることで日本と諸外国との友好親善を深めます。



地域の発展への貢献

地域に根ざし、次代に引き継ぐべき伝統行事や文化の継承を支援するとともに、地域社会が抱える諸問題の解決に取り組めます。



災害復興支援

大規模災害により被災した方々が、日常生活を一日でも早く取り戻せるよう、復旧・復興を支援しています。



イオン チアーズクラブメンバー募集中！
入会金・年会費無料

「イオン チアーズクラブ」は、小学生を中心に全国のイオングループの店舗等を拠点に、約540クラブが環境や社会貢献をテーマに体験プログラムを行っています。



詳しくはこちら

イオンワンパーセントクラブ

検索

